



に近いこの地勢を選んだ由であって、正直の処都市計画的にはどうかと思われる場所(山梨日日新聞昭和十八・二・二十五)であった。都市計画の理念や構想に対して、現実の疎開工場の立地が先行していたのである。

注7 向原地区に兵隊が駐屯した時期について
舟久保兵部右エ門氏は、『戦中の思い出』に「19年の下期私どもの地区(向原)へ歩兵部隊が入ってきた」と書いています。
今回の聞き取り調査でも、複数の人が部隊の駐屯と横穴工事は昭和19年からと話しています。
また、山梨学院大学の松本武彦氏の論文「本土決戦態勢の構築と住民動員 一特に山梨における軍の動向と関連を中心として」の注(5)の八田政季氏の証言に「私が日川中学2年の時、昭和19年の末から20年1月ないし2月頃、現在の山梨市万力から南地内にかけて、国道140号線西側の斜面に横穴を掘る作業をおこなった。」とあります。

注8 範部隊長の「訓示」について
「範(3GD)兵团統率の方針」(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室蔵)
「訓示」に次のようにあります。
「二 防諜の徹底を期すべし
今次演習は国軍防衛態勢確立の一翼をなすものを以て現下敵性諜報活動に鑑み之が機密保持の萬全を期し特に書類の保管取扱輸送物件の秘匿工事現場の警戒監視遮蔽及私信の黙検等に留意することを要す」

注9 地元の協力者について
「近衛歩兵第三連隊史」の「第二章 近衛歩兵第八連隊概史」 P899
幸いな事に同町の秋山徳次郎氏から、岩盤掘鑿について技術指導と機・資材提供の協力申し入れがあり、難工事を覚悟した本作業が予期せぬ速度で進捗し当初の心配が杞憂に帰したばかりでなく、編成後の聯隊に大きな自信を与えるところとなった。

注10 写真に写る女子学生について
聞き取りで、岳麓高等女学校の女学生で向原地区の人がいることが確認できました。
また、当時、大月市にあった都留高等女学校の学生であった人から、制服の襟が白いのは統一した制服であるとの証言を聞きました。

「近衛第三師団作命甲綴 其ノ一」(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室蔵)
・「範作命甲第三十號 範部隊命令」
・「範作命甲第三十號ニ基ク參謀長指示」
・「別冊 患者療養所開設ニ関スル指示 範部隊」
・「吉田附近 宿營建物配置図」
・「附図第二 別紙第一」
「範(3GD)兵团統率の方針」(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室蔵)
「戦史叢書75 大本營陸軍部8」 防衛庁防衛研修所戦史室編 (防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室蔵)

「近衛歩兵第三連隊史」近歩三史刊行委員会 昭和60(1985)年 (国会国会図書館蔵)
・「第二章 近衛歩兵第八連隊概史」(P898～)

「山梨県史」通史編6 近現代2 「第二章 戦時期 第五節 戦時体制の崩壊 第一項 疎開一人と軍施設 P290～P291
前書資料編15 近現代2政治行政II 資料108「敗戦時県内所蔵地別軍需品リスト」 P338～P340
「富士吉田市史」史料編第六巻 近現代I
「旧三カ村事務報告書 瑞穂村編」、「同 福地村編」、「同 明見村編」(富士吉田市史料叢書1・2・3)
「富士吉田市史研究」1992.3 第7号 P165～「史料-南都留郡下吉田町昭和二十年度事務報告書」
「山梨の戦争遺跡」山梨県戦争遺跡ネットワーク編 山梨日日新聞社 2000年
・コラム立川陸軍航空廠の関連施設 P129
・武蔵航空工場被爆殉難者の碑 P130
・平和への証言 戦争は人間がする最大の罪悪 舟久保寛氏 P132

「國史大辭典」本土決戦計画 戦艦大和 吉川弘文館
「日本史大辭典 6巻」1994年 株式会社平凡社
「昭和史全記録 1926～1989」本土「決号作戦」(P314) 毎日新聞社
「1億人の昭和史 日本の戦史10太平洋戦争4」1980年 毎日新聞社
・終戦時の日本陸軍編成(P267、268)
「新聞集成昭和編年史 昭和二十年度版1」明治大正昭和新聞研究会
・昭和20年1月19日付け 朝日新聞(東京)「一億特攻隊」P221
・昭和20年3月25日付け 朝日新聞(東京) 本土決戦に「国民義勇隊」組織 P1077
・昭和20年3月26日付け 毎日新聞(大阪)「自発的防衛隊 各地に結成」P1090

写真提供 高村郁子氏(山梨県南都留郡山中湖村在住)

尚、地元の人への聞き取り、西方寺住職・老師への聞き取りは、平成30年4月から8月に実施しました。

参考及び引用した文献一覧
「語り継ぐ戦争体験 第10回吉田空襲展に寄せて」1992年 吉田空襲展実行委員会編集
・舟久保兵部右エ門氏「戦中の思い出」
・勝保源寛氏「バルテ峠激戦の七日間」
「富士吉田に残る戦争遺跡フィールドワーク資料」2003.8.16 安藤正文(郡内近代研究会)

「本土決戦体制における富士北麓の意義 一「イ」号演習の展開と地域社会一」
山梨学院大学 松本武彦氏 法学論集より 平成28年度論文集
「本土決戦態勢の構築と住民動員 一特に山梨における軍の動向と関連を中心として」
山梨学院大学 松本武彦氏 一般教育部論集より 平成14年1月24号
※「本土決戦計画」に関して、軍の動きと山梨県内における演習及び住民動員については上記の論文に詳しく述べられています。

FUJISAN MUSEUM
ふじさんミュージアム
ご案内

開館時間 / 午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)
休館日 / 火曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始
観覧料 / ◎御師旧外川家住宅との共通入館券:
大 人400円(団体320円)
小中高生200円(団体160円)
◎富士山レーダードーム館・御師旧外川家住宅との共通入館券: 大 人800円(団体600円)
小中高生450円(団体350円)
交通案内 / ●中央自動車道河口湖ICより車で15分
●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分
●富士急行線富士山駅より山中湖方面バス15分「サンパークふじ」または「富士山レーダードーム前」下車
駐車場 / 西側駐車場: 普通車35、バス6
東側駐車場: 普通車20、バス5、身障者1



〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665 ホームページ URL ●http://www.fy-museum.jp/
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJISAN MUSEUM 発行/平成31年3月31日 印刷/K2・ONE

Contents
・博物館Report …… 1-8
謎解き! 「一億總特攻」の石碑



■記念碑からの富士山

謎解き! 「一億總特攻」の石碑
～戦争に生きた富士北麓の人々～

1 謎の石碑はどこに

富士吉田市小明見にある西方寺は、昔はそれより1.5kmほど東に離れた山すそに広がる向原地区の上村の山岸と呼ばれる場所にありました。
この西方寺の旧地の土手の上に河原石の石碑が立っています。複数の丸石を組み合わせた方形の台座の上に、高さ50cm余りの丸みを帯びた石を基壇にした高さ130cmの石碑です。その三面には文字が刻まれています。
今では、刻まれている文字について語ることができる人や、石碑が建てられた経緯を知る人はほとんどいません。以前は、石碑の

周辺には地元の人が「ボウクウゴウ(防空壕)」とよぶ横穴がありましたが、穴もふさがり見ることはできなくなって、60才代以上の人が穴で遊んだことなどを覚えているぐらいです。そのため、石碑があることを知る人も少なくなってきました。
そこで、石碑が何を意味しているかを調べて、今から70年余り前の太平洋戦争末期の富士吉田市域の出来事を少しでも明らかにしたいと思います。

(正面)	一億總特攻
(側面)	表字 皇紀二千六十五年 範部隊
(背面)	衛工物竣工記念 工事擔任部隊 同配屬部隊 協力民間團體 範第三八二四部隊 範第三八二九部隊 下吉田町 明見村 忍野村 東桂村 西桂村 岳麓農工学校 岳麓高等女学校 明見國民学校 西桂國民学校
	林芳太郎閣下 執筆

■石碑銘文



2 なぜ、石碑は忘れられてしまったのか

(1) かつては、石碑を知る人もいた

これまでに石碑と横穴について記述された資料をみると、地域の歴史に詳しい舟久保兵部右エ門氏が、『戦中の思い出ぐさ』（平成4年に編集された『語り継ぐ戦争体験』に収録）に、「昭和19年の下期私どもの地区（向原）へ歩兵部隊が入ってきた。兵隊は村の内外に分宿し、やがて私の部落北側通称背戸山の裾に横穴を掘り始めた。穴から出た土は穴の前に積み、道をきずいた。毎日毎日多くの兵隊がつるはしをふるった。他方山からは松の木が切り出され、…（穴の）天井と横壁に差し込まれた。…この穴は翌年の初めに完成し、そこに運びこまれたのは飛行機の発動機であった。…8月15日終戦となり、日本各地に米軍が進駐して

きた。秋になると突然米兵がやってきた。^(注1)…穴に運び込まれた発動機は全部壊されてしまった。…この山の穴群の中ほどの通称山岸、現西方寺の旧地の一角に大きな河原石の一つの碑が東向きに立っている。…」と書いています。 ※（穴の）は筆者補足

また、『富士吉田に残る戦争遺跡フィールドワーク資料』（平成15（2003）年に実施されたその路研究会主催の臨地研修のために配布）の「明見地区の一億総特攻の碑と軍物資秘匿横穴跡」の項には、平成15年8月14日に行った電話取材に対して舟久保寛氏が、「向原地区武藤氏宅に一億総特攻の碑が建立されている。兵隊によって作られた。…昭和19年末か20年初期に軍の飛行機部品を秘匿するために萬（万）年寺の下に横穴が20本以

上掘られた。奥行きは20m以上で横の長さは1,000m位あった。動員されたのは村民（高齢者あり）、岳麓農工の生徒、立川陸軍航空廠の兵隊が掘った。…この横穴には武蔵航空の部品も運ばれた。戦後GHQの手で爆破された」と語ったと書かれています。 ※（万）は筆者補足

(2) 富士吉田市域にある戦争遺跡

太平洋戦争中に山梨県内に疎開や新設された軍事施設や軍工廠は十数か所があるといわれています。『山梨県史』には、「陸海軍が本土決戦を叫んだ昭和二十年春から、県内に軍事施設の新設や疎開が相次いだ。その中で最大のもは、中巨摩郡の飯野村（現南アルプス市）と源村有野（同前）にまたがる広い範囲に、軍の飛行場とその関連施設を建設する大規模な工事で、陸軍の

秘密呼称でロタコと呼ばれた大土木工事であった」とあり、この工事の「ほかに県内十数か所に、軍事施設・軍工廠が設置された」と書かれています。

また、『山梨県史』資料編には、「敗戦時県内所蔵地別軍需品リスト（昭和20・10・9）」があり、「軍需品等集積ニ関スル調査」として「部隊名：立川航空廠吉田派遣部隊 町村：下吉田町 場所：下吉田 暮地 赤坂洞窟 品名及び概数：発動機部品 飛行機部品 相当、金属材料 工業用化学薬品 試薬品 工作機械器具 若干、塗料 相当」と記述されていることから、現在の富士吉田市域である下吉田町、暮地、赤坂洞窟にも軍事関係の施設が作られていたことがうかがわれます。

平成12（2000）年に出版された『山梨の戦争遺跡』には、富士吉田市内の戦争遺跡について



「コラム 立川陸軍航空廠の関連施設」と「武蔵航空工場被爆殉難者の碑」、そして「平和への証言 戦争は人間がする最大の罪悪」の項に記述があります。

この内、「武蔵航空工場被爆殉難者の碑」の項には、富士吉田市竜ヶ丘地区にあった武蔵航空工場が昭和20年7月30日に米軍機によって空襲されたことが書かれています。

「コラム 立川陸軍航空廠の関連施設」の項には、空襲を避けるために上吉田町赤坂地内に奥行き50mほどの横穴7本を掘り、ここで航空機の発動機を特攻機用に改修していたことや忍野村の小学校でも発動機を分解・修理したことが書かれています。また、派遣されていた部隊が、下吉田と上暮地で地元の工場を接収

して航空機部品を生産していたことも書かれています。

「平和への証言 戦争は人間がする最大の罪悪」の項には、自身も武蔵航空工場で空襲にあった経験を持つ元教員の舟久保寛氏が、空襲時の体験談のほか、明見小学校時代に高等科の生徒を連れて梨ヶ原の演習場作りに参加したことや岳麓農工学校時代には、生徒を連れて立川陸軍航空廠の薬品を入れる地下壕の工事に参加して、壕から出た土を外へ運び出す作業をしたと書いています。

(3) 記録から消された石碑と横穴

平成28年（2017）に山梨学院大学法学部法学科の松本武彦氏が発表した論文^(注2)には、太平洋

戦争末期の本土決戦体制の構築と富士北麓地域の様子が詳細に述べられています。その中で該当の石碑について現地取材をもとに、「現在、富士吉田市小見の向原地区にある背戸山の南麓に、「一億総特攻」なる語を刻んだ石碑と地下壕の跡が存在する」として、石碑に刻まれている文言が記録されています。

しかし、『富士吉田市史』の史料編、富士吉田市史料叢書の『旧三カ村事務報告書 瑞穂村編』、『同 福地村編』、『同 明見村編』を調べましたが、具体的な記述を確認することはできませんでした。

また、『富士吉田市史』通史編第三巻の近現代に「軍事関係の役場文書は敗戦時に焼却処分したとの記述がありました。^(注3)

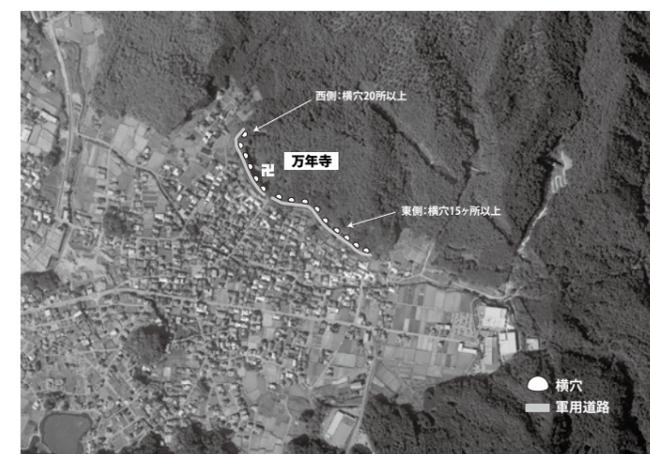
そのことから石碑や横穴に関する公的な記録には残されていないと考えられます。

一方、前述の『富士吉田に残る戦争遺跡フィールドワーク資料』によると、「軍の飛行機部品を秘匿する」ために作られた横穴なので記録に残す必要がなかったわけでした。^(注4)

そして、これまで石碑と横穴に関する具体的な調査がおこなわれてこなかったため、石碑のことは一部では知られていましたが、記録から消されたものになったのです。

『富士吉田に残る戦争遺跡フィールドワーク資料』の作成者も「何のためにつくられたのか？これからの調査が必要」と指摘しています。

3 謎の扉を開く



(1) 地元の人への聞き取り

今回の調査で改めて地元の人に話を聞く機会を持つことができました。しかし、当時を知る人は80才以上になり話を聞くことができる人が少なくなり、また、

あって、奥で穴と穴を結ぶ横の穴があつてつながっているものもあった。
・万年寺山門東側の山すそには15、西側には20以上の穴があった。
・横穴から出た土で盛り土をしてグンヨウドウロ（軍用道路）とよばれる道を作った。
・横穴の入口には木製の扉があつて中には入れないようにしていた。中に何を入れたか当時は知らなかった。終戦後に発動機などの飛行機の部品が入っていたことが分かった。

○工事について

・兵隊は、旧明照保育園（万年寺山門付近）の建物（当時青年会館）や向原地区の大きな家に分宿して自炊をしていたが、地元の人はおにぎりをつ

くり渡していた。
・兵隊の多くは20才代であった。
・当時中学生だった女性が、兵隊の中に「大久保大佐」という人物がいて、石碑の前で一緒に写真を撮ったと語った。
・工事に参加した地元の人の中に、当時50才ぐらいの忍野村の人がいた。
・横穴の補強のための木材は、地元の人が所有している松林の木が使われた。
・横穴の入り口は木の扉があり、穴の中のことはわからなかった。

○戦後の様子について

・戦争が終わるとすぐに米兵が来て、横穴の中の部品を運び出して持ち去ったり、その場で壊していた。

・万年寺西側の山すその横穴は、そばに人家がなかったからダイナマイトで爆破された。
・横穴に残った金属類は地元の人が回収業者に渡した。
・壊されずに残った横穴は、夏涼しく、冬暖かかったので、サツマイモや野菜の貯蔵庫として使っていた。

今回の聞き取りで向原地区に在住する多くの人から横穴が存在したこと、横穴の前にグンヨウドウロ(軍用道路)とよばれる道があったことの証言を聞くことができました。

(2) 石碑が語るもの

ア) 石碑の正面に刻まれた「一億総特攻」とは

このことに関して、当時の新聞記事から考えてみました。

昭和20(1945)年1月19日付けの朝日新聞(東京)に、当時の総理大臣である小磯国昭の年頭の言葉とし「一億特攻隊たれ」が掲載されています。記事には、「本土襲撃の諸翼は帝都ばかりでなく、京阪神その他の各地まで伸

び」のような戦局が厳しさを増す中で、「小磯首相の言葉を待つまでもなく、一瞬の予断も許さぬ。この戦勢に民一億が特攻隊員として出陣すべき秋(とき)はまさしくけふ(今日)である」と、勇ましい文言が続いています。※(とき)のルビ、(今日)の漢字表記は筆者補足

同年3月25日付けの朝日新聞(東京)には、同月23日に閣議決定された「国民義勇隊」を組織することについての記事が載っています。それは、「本土決戦に 国民義勇隊 組織 防衛・生産の一体化 武装総決起の秋(とき)に備ふ」の見出しで、全国民を挙げて国民義勇軍を組織して防衛・生産の一体化で本土防衛体制を強化し、さらに情勢が逼迫した場合は、国民全員が武器をとって決起することを書いています。同じ記事には、小磯総理大臣が「一億総決起、もつて神州護持に火の玉の体当たりを敢行すべきことを要望する」という談話を発表していることも書かれています。

また、翌日の3月26日付け毎日新聞(大阪)には、「敵の本土襲撃に対して一億国民は神州護持

の熱烈なる気魄をもって政府の号令を待たず全国各地に本土防衛に挺身する防衛隊が続々と自発的に結成されて」いるとして、山梨県でも、「甲府市において日清・日露両役に奮戦した勇士で五十五歳以上の五百余名が山梨老年義勇隊を結成」したと書かれています。

このように、昭和20年3月頃の日本は、本土決戦を目指す軍部が主体となって、国民総てが特攻隊員であるという意識が国民一般に浸透していたと考えられます。

イ) 石碑の側面の「範兵団長陸軍中將 林芳太郎」、背面の「擔任部隊 範第三八二四部隊 同配属部隊 範第三八二九部隊」とは ※「擔任」(担任)「範兵団長」の「範」ということばは、日本陸軍における軍隊の通称号あるいは符号の1つで、この通称号でよばれていた「範」部隊は、近衛第三師団を指すわけです。ちなみに近衛第一師団は「隅」、近衛第二師団は「宮」の通称号でよばれていました。

近衛第三師団は、日本に駐屯していた近衛第二師団の留守部隊を中心にして、昭和19(1944)年7月に再編成して作られた師団です。石碑の「一億総特攻」の文字を書いた林芳太郎陸軍中將は、昭和19年7月から翌年5月23日まで近衛第三師団の師団長を務めた人物です。その後、山崎清次陸軍中將が師団長に就任して終戦を迎えることになります。同師団の参謀長は大久保精一大佐という人物です。

次に、工事をおこなった担任部隊である「範第三八二四部隊」は、近衛歩兵第八連隊のことを指しています。近衛歩兵第八連隊は、近衛歩兵第三連隊が補充・改編されて編成されたもので、昭和19年7月に臨時動員の命令で「範第三八二四部隊」とよばれたわけです。連隊長は、永沢正美大佐という人物です。

また、「同配属部隊」である「範第三八二九部隊」は近衛工兵第三連隊を指しています。



■一億総特攻碑



■石碑背面に刻まれた銘文

4 本土決戦計画と「吉田附近」(富士吉田市及び西桂町)の関わり

(1) 本土決戦計画とは

昭和19(1944)年7月、サイパン島が陥落すると米軍(連合軍)による日本の各地に空襲が行われるようになりました。その後、同年10月にはじまったレイテ沖海戦に敗れたことで戦局はますます厳しい状況になっていきました。この状況を受けて日本陸海軍(大本営陸海軍部)は、本土で米軍(連合軍)を迎え撃つ作戦、すなわち本土決戦の準備を進めるようになるわけです。

昭和20(1945)年1月、「帝国陸海軍作戦計画」を決定して、同月20日には天皇の裁可をえました。この計画は、米軍(連合軍)が、昭和20年秋までに本土に進攻するという判断のもとに作られたわけで、特に関東・九州・南朝鮮において本土決戦準備を完成することに重点を置きました。

昭和20年4月8日、大本営は本土決戦に備えた「決号作戦準備要綱」を決定しました。決号作戦は、連合軍の本土への上陸を想定して1号～7号まであり、このうち関東地域、九州地域への上陸がもっとも可能性があると判断された。このうち関東地域、九州地域への上陸がもっとも可能性があると判断された。このうち関東地域、九州地域への上陸がもっとも可能性があると判断された。このうち関東地域、九州地域への上陸がもっとも可能性があると判断された。

これらの本土決戦準備の中で、いくつかの「演習」といわれる陸軍部隊の作戦行動がありました。その一つが山梨県内でおこなわれた「イ」号演習とよばれるものでした。

(2) 「イ」号演習とは ～「範作命甲第三十號 範部隊命令」を読み解く～

「範作命甲第三十號 範部隊命令 一月二十七日 東京」の

1に「東京都竝ニ其近傍ニ於ケル中央補給諸廠ノ実施スル「イ」號演習ニ協力ス」と記されています。

「イ」号演習とは、本土決戦準備の一環で、米軍(連合軍)の上陸を想定して、首都東京及び近郊にある軍施設や軍需工場の兵器関連機材、資材を内陸部に移して、航空機等の兵器の生産拠点を確保して、上陸してくる米軍(連合軍)への反転攻勢をかけるためのものでした。すなわち、東京の立川航空廠等の航空機の機材・部品等を疎開・隠匿する軍の作戦行動です。「範」部隊はその行動に協力する命令を出したわけです。

当時、「範」部隊は、本土決戦準備のための「林」号演習という作戦行動で、千葉県内の九十九里浜地域で米軍(連合軍)の上陸に備えて陣地を構築していました。

「範作命甲第三十號 範部隊命令」にもとづく「参謀長指示」によると、部隊の九割の人員を「イ」号演習に配置することと、残りの一割は千葉県内で「林」号演習を継続することを指示しています。

このような状況の中で「範」部隊は、山梨県の甲府地区(現在の甲府市)、日下部地区(現在の山梨市、甲州市)、そして、吉田地区(現在の富士吉田市、西桂町)で「イ」号演習を計画・実施したわけです。

吉田地区では、学校・公民館等の公共の建物や寺院・神社を兵隊の宿舎として割り当てる計画をしていました。部隊の事前調査による各施設の定員をみると富士吉田市内(下吉田町、福地村)には合計2,057人の兵隊が宿営

する計画をしていたことがわかります。また、上暮地地区を含む西桂町内には合計315人でした。すなわち、2,300人を超える兵隊が駐屯することになるのです。石碑に刻まれた「範第三八二四部隊」と「範第三八二九部隊」が、「イ」号演習で吉田地区に駐屯した部隊になるわけです。

このことについて、『南都留郡下吉田町昭和二十年度事務報告書』^(注5)の「振興運動ノ状況」および「町費補助団体其ノ他事業状況」の項に、下吉田町の各団体の活動報告が次のように記されています。

常会：部隊ノ駐屯スルヤ勤勞奉仕隊ヲ組織シ雨雪ヲ犯シ嚴寒期各作業ニ従事セリ尚部隊ノ慰安激励等モ実施セリ …(略)

在郷軍人分会：駐屯軍ニ対スル勤勞奉仕並ニ宿營其ノ他便宜供与ニ努力シ …(略)

大日本婦人会：駐屯軍隊ノ協力在郷軍人会婦人常会ト一体トナリ …(略)

少ない記述ですが、昭和20(1945)年の「嚴寒期」に下吉田町に部隊が駐屯して、下吉田町の人々が勤勞奉仕隊を組織して各作業に従事ことや、駐屯部隊のために宿營準備をしたことなどがわかります。ここに記述されている駐屯した部隊(駐屯軍)が、富士吉田市域で「イ」号演習を実施した「範」部隊の可能性が高いと考えられます。

「範第三八二四部隊」である近衛歩兵第八連隊の動きに関して、昭和60(1985)年に刊行された『近衛歩兵第三連隊史』の「第二章 近衛歩兵第八連隊概史」に

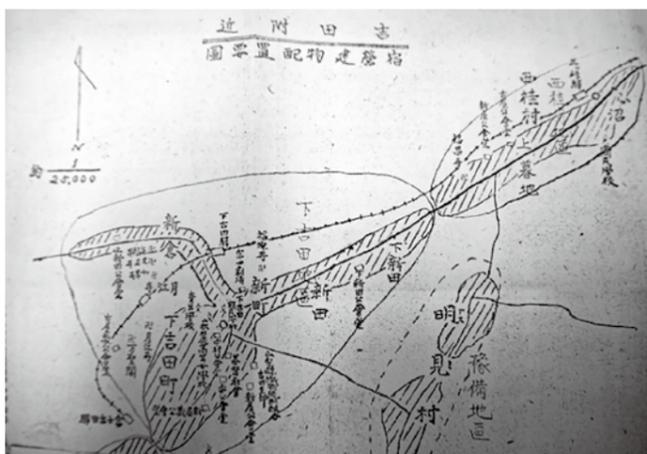
よると、部隊は、昭和19年10月26日に「林」号演習が開始されると現在の千葉県一宮町で連合軍の上陸に備え防禦の陣地を構築していました。そして、翌年の昭和20年1月27日に「イ」号演習が開始されると、部隊の主力は現在の富士吉田市に移動し、上暮地(当時は西桂町)付近の山腹に地下壕を掘削することになったわけです。作業予定地を偵察した部隊長以下は、十字鋸等が全く歯が立たない硬い地盤に直面し、しばし佇立したということです。しかし、部隊は、地元の土木関係者の機材や資材の協力があり、同年3月8日には「イ」号演習を完了して、嚴寒続く富士北麓の地から、陽春の一宮地区に復帰して、「林」号演習にまい進したとのことです。

このことについて、『南都留郡下吉田町昭和二十年度事務報告書』^(注5)の「振興運動ノ状況」および「町費補助団体其ノ他事業状況」の項に、下吉田町の各団体の活動報告が次のように記されています。

(3) なぜ、地下壕は向原地区で掘られたのか

多くの人員と機材・資材を円滑に運搬するためには、大量に運べる鉄道を利用するのが当然です。そのため「演習」が可能な場所は鉄道沿線が選ばれるわけです。^(注6)「吉田附近」は中央線大月駅から現在の富士急行線が敷かれています。作業予定地であった上暮地地区は富士急行線の沿線にあります。

「範作命甲第三十號 範部隊命令」の「吉田附近 宿營建物配置図」によると向原地区を含む明見村は「豫備地區」としての位置づけになっています。現在、石碑のある付近から富士急行線の寿駅(上暮地地区内にある駅)まで徒歩で30分、40分はかかってしまいます。(当時とは違う道筋なので一概には比較できないが)では、なぜ予備地として位置



■吉田附近宿営建物配置図(本土-東部-34)／防衛省防衛研究所所蔵

づけられた向原地区に石碑が建てられ、地元の人々が「ボウクウゴウ(防空壕)」とよぶ横穴の存在や「グンヨウドウロ(軍用道路)」といわれる場所のことを証言するのでしょうか。

前述の「範作命第三十號ニ基ク参謀長指示」の5には「現地設計班ハ試掘班ヲ同伴シ外的觀察ヨリ判定シ難キ地區ノ土質ヲ検スルモノトス」と記述されています。すなわち、事前に対象地であった上暮地地区の調査が派遣部隊によっておこなわれたわけです。ところが、『近衛歩兵第三連隊史』『第二章 近衛歩兵第八連隊概史』に書かれているように「作業予定地は、十字鍬等が全く歯が立たない硬い地盤」だったわ

けです。向原地区の横穴が掘られていた該当地の土は、地元の人々が「カマツチ(土)」とよび、粘土質で崩れにくい土質で掘りやすかったのではないかと推測します。また、該当地は、南向きの斜面で厳寒期の工事としては活動が容易だったのではないのでしょうか。

また、掘削工事予定の壕の数について、「範作命甲第三十號範部隊命令」の「附図第二 別紙第一」では35本程度を掘ることが計画されていました。それに対して、証言等には「萬(万)年寺の下に横穴が20本以上掘られた」、「万年寺山門東側の山すそには15、西側には20以上はあった」とあります。

これらのことから、「吉田附近」

に駐屯した部隊が実施した壕(横穴)の掘削工事は、主に向原地区でおこなわれたと考えるのが妥当ではないでしょうか。

上暮地を含む西桂町内の国民学校・公会堂・寺院等を宿舎として収容する計画であった315人の一部を、向原地区にある青年会館(現在の万年寺山門付近にある旧明照保育園)や民家(聞き取りによると数軒)に振り分けたと考えられます。

戦争中とはいえ、多くの兵隊が向原地区に一度に駐屯したことは、それまでになかった出来事だと思われるので、地元の人もはっきりと当時のことを証言することができたのではないのでしょうか。

(4)発見!「飛行機のタイヤ」～ふじさんミュージアムに保管～

調査の中で、ふじさんミュージアム(富士吉田市歴史民俗博物館)に「飛行機のタイヤ」といわれるものが6本保管されていることがわかりました。このうち、4本は荷車に使用したものかそれぞれ2本が車軸でつながっています。残りの2本は別々になっています。それぞれのタイヤには次のような文字が刻まれています。

日本タイヤ株式会社製 NO

570×190 常時内圧 4.5kg/cm² 6層と製造年月です。

製造年月は、昭和18年7月製1本、昭和18年10月製1本、昭和18年〇月製1本、昭和19年1月製3本です。(*〇は判読不明)

車軸でつながっている4本は市内小見見地区に在住する人から寄贈されたものです。寄贈した人は、昭和20年の終戦前に向原の山から兵隊にもらってきたと証言しています。当時、兵隊にお茶を入れたりして心やすくなり、使うのであれば持っていけといわれてもらってきたものだそうです。また、タイヤの保管については複数の証言があり、西方寺にも一時保管されていたこともあるようです。

ふじさんミュージアムに保管されているタイヤは、「イ」号演習でこの地にもたらされたものの一部ではないかと考えられます。



■飛行機のタイヤ

5 謎の石碑が語るもの ～まとめとして～

(1) これまで報告してきましたように富士吉田市域で「イ」号演習が実施されたことは明白な事実と考えます。石碑に「術工物竣工記念」と記されていることから「イ」号演習の記念として建てられたわけで、向原地区が「イ」号演習を実施するうえで重要な場

所の一つであったのです。

今から74年前の昭和20(1945)年1月、富士吉田市域に突然多くの兵隊が駐屯して、^(註7) 勤労奉仕の名のもとに多くの人々が軍に協力していきました。今も里山の風景が見られる向原地区に住む人々も否応なく戦争を直に感じ

たに違いありません。そして、石碑は、この地にも戦争があったという証でもあるわけです。

(2) それでは、石碑はいったい誰によって建てられたのでしょうか。

このことについて松本武彦氏は、前述の論文で「近衛師団が残

した碑」は、誰によって建てられたか、これまでの調査結果から推論していきたいと思えます。

富士吉田市域で作戦行動した「範」部隊は、当時、米軍(連合軍)の上陸に備えて千葉県で陣地の構築にあたっていたわけで、迫りくる決戦を前にして、石碑を建てる時間的余裕が果たしてあったのでしょうか。また、「イ」号演習の実施に対して出された範部隊長の『訓示』^(註8)に「保管取扱輸送物件の秘匿工事現場」と示しているわけで、このような「秘匿」しなければならない場所に記念碑的な構築物を軍が主導して建てるのでしょうか。

一方、聞き取り調査で地元の人々は兵隊におにぎりをつくり渡していたことを証言しています。また、舟久保兵部右エ門氏も「戦中の思い出ぐさ」のなかで「兵隊も腹が減っているのである。…近くの人は勿論、村の心ある人々は毎日10時と3時にはお茶を入れ、有り合わせの野菜を料理し、大豆を煎ってけなしの砂糖をまぶして振舞った」と書いています。また、『近衛歩兵第三連隊史』の「第二章 近衛歩兵第八連隊

概史」には、地元の土木関係者の機材や資材の協力があって「難工事を覚悟した本作業が予期せぬ速度で進捗し当初の心配事が杞憂に帰したばかりでなく、編成直後の聯隊に大きな自信を与えるところとなった」と書かれています。

このように、米軍(連合軍)との本土決戦が近づきつつある厳しい情勢の中に置かれている兵隊と地元の人との間に「イ」号演習という工事を通じて互いに交感の情が生まれたのではないのでしょうか。そのことが石碑を作るきっかけとなり、地元の有志^(註9)が、軍への協力と勤労奉仕の証として建てることを望み、そこで、軍も部隊長による「一億總特攻」の執筆を了解したのです。駐屯した兵隊も、地元民に感謝の念があったからの対応だったと思えます。このことは、石碑に刻まれている「術工物竣工記念」、「協力民間団体」の文言からも読み取れるのではないのでしょうか。すなわち、石碑は地元民が中心で建てたものなのです。

今回の聞き取りで、当時、兵隊と写真を撮ったという証言を聞



■記念写真

くことができました。撮影時期は不明ですが、石碑の前で「大久保大佐」とよばれる人物を含む2人の兵隊と女子学生たちが一緒に写っている写真^(註10)が確認できました。2人の兵隊は、石碑の完成を見届けるためにわざわざ千葉県からやってきたと考えられます。

(3) 前述したように石碑が建てられた当時の「軍事関係の役場文書は敗戦時に焼却処分」したために記録が残っていない、「イ」号演習で駐屯した「範」部隊の活動の詳細は不明です。結果として富士吉田市域における太平洋戦争末期の数か月間の軍事に関する多くの空白になっているのです。

また、「イ」号演習実施の数か月後におきる武蔵航空工場などへの空襲(昭和20年7月30日と8月13日)について、『山梨の戦争遺跡』の著者も、「武蔵航空の

全容や何故富士吉田が空襲されたのか明らかにする必要があります」と指摘しています。

今後も資料(史料)を掘り起こして、70数年前の富士吉田市域における太平洋戦争末期の様子を少しでも明らかにしていかなければなりません。

結びにあたり、山梨学院大学の松本武彦氏から多くの情報とご教授を受けたことに改めて感謝申し上げます。聞き取り調査に快くご協力いただいた方々に感謝を申し上げます。

本文は、富士吉田市教育協議会平和教育研究部会、社会科学部会の研修会のために作成した報告書を加筆修正したものです。このような調査の機会をつくっていただいた富士吉田市立下吉田中学校教頭の勝俣光司先生をはじめ両部会の先生に心からの謝意を表します。

(館長 宮下仁)

注1 戦後の占領軍の進駐について『勝山村史』上巻 第九章 戦後の歩み 第一節 社会情勢の諸相 二 富士ビューホテルの接収 P1107

日本人が敗戦を実感したのは進駐してきた占領軍を目の当たりにした時であろう。甲府には九月二十四日にアメリカ軍の第九師団の将兵一千名が進駐した。なお、吉田警察署管内では、十一月までに北富士演習場が接収され、それ以外では下吉田町、明見村、勝山村に進駐した。勝山村の進駐は富士ビューホテルの接収が目的であった。

注2 「本土決戦体制における富士北麓の意義 -「イ」号演習の展開と地域社会-」山梨学院大学 松本武彦氏 法学論集より 平成28年度論文集

注3 公的な資料には記録が残されていないことについて『富士吉田市史』(平成11年)通史編 第三巻 近現代 第4章 昭和前期の地域社会 第4節 戦争と民衆生活 三 勤労と戦死 出征兵士の増加 P712

これにともなって各町村の「事務報告書」の「兵事ニ関スル事項」も勢い記述が増加することになる。しかし、一般に兵事に関する記述は機密保持のため簡略な場合が多く、また、軍事関係の役場文書は敗戦時に焼却処分となりほとんど残されていない。

『秋山村誌』(平成4年)第七章 昭和後期 第一節 終戦のころ P558 十一月には旧陸軍の演習地だった北富士演習場が米軍に接収された。本村には米軍が視察に来るのは必死と考え、村役場は戦争関係の公文書などを故意に焼失させた。

注4 「秘匿」については、後述する範部隊長の『訓示』に「機密保持の萬全を期し特に書類の保管取扱輸送物件の秘匿工事現場の警戒監視遮蔽及私信の黙秘等に留意することを要す」とあります。

『範(3GD)兵団統率の方針』(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室蔵) 注5 「富士吉田市史研究」1992.3 第7号 P165～「史料-南都留郡下吉田町昭和二十年度事務報告書」

注6 戦争末期の疎開に関連して、鉄道輸送と工場の建設場所について『山梨県史』通紙編6近現代2 第二章 戦時時期 第二節 戦時統制と開発 「戦争末期の工場疎開」 P220～P221

甲府市に建設された東京芝浦電気工場の敷地は、「鉄道の輸送上の関係とからで、特に取